

吉澤義則 編

未刊國文古註釋大系

第九卷

清
文
堂

未刊国文古註釈大系（全十八卷）第九卷

昭和十三年六月二十日

初版発行

昭和四十三年十月五日

複刻版発行

編纂者

吉澤義則

発行者

前田勝雄

製版者

京都市下京区柳馬場四条通下

光綾写真製版株式会社

能登英夫

印刷者

京都市南区東九条南石田町一

朝陽堂印刷株式会社

高橋清二

製本者

大阪市天王寺区勝山通一ノ一〇

倉橋製本株式会社

倉橋重男

発行所

大坂市南区二ツ井戸町十五
清文堂出版株式会社

振替 大坂六二三八

電話 四六二六五（代）

郵便番号 五四二

未刊國文古註釋大系

第九冊 目次

伊勢物語嬰兒抄	二冊	一
伊勢物語昨非抄	一冊	八
竹取物語抄補註	一冊	一〇
竹取物語伊左々米言	一冊	一七
大和物語系圖	一冊	二七
大和物語別勘	一冊	三二
大和物語追考	一冊	三二
大和物語纂註	三冊	三七
大和物語管窺抄	缺三冊	三七

伊勢物語嬰兒抄

二冊

著者未詳

伊勢物語嬰兒抄開題

本書は上・下二卷から成つてゐる。

本書は伊勢物語の註釋ではあるが、奥に

さるをわかき御心にてわりなき仰事ともいなみかたき事にてなん、そこはかとなくつゝけ侍る、ゆめ
もらし給ふ事有へからすとそ、是少人の御心にしたかひ奉るのみ、則嬰兒抄とや申侍らん

とあるので、わかき御方（どなたか皇子様ではなからうか）に御進講申上げた本のやうである。嬰兒抄の
題名は此處から發してゐる。

本書は、伊勢物語の本文を數行宛を擧げて叮嚀に註釋を加へたものである。「古註」といふのがよく引用
されてゐる。これは伊勢物語古註と呼ばれる伊勢物語抄十卷のことであらうか。又「おもひあらはむくら
の宿に」の歌の註に「いちぜんの御説」とあるのは、一條禪閣兼良の愚見抄の説であらう。又「わすれ草
おふる野へとは」の歌の註に「兼載聞書」の説が掲げられてゐるが、猪苗代兼載に伊勢物語聞書といふ著
書があつたやうである。なほ同處に、

近年紹巴法橋ついぜんにしやういしつほつく

うへてみんなきおやおもひわすれ草

といふのが擧げられてゐる。紹巴は西洞院時慶卿記によると慶長七年に歿してゐる。しやうしつは昌叱
（號策傳、慶長八年歿）のことであらう。故に本書は慶長八年頃の撰述とすべきではなからうか。

本書の傳本としては、本書の底本とした小川壽一氏所藏本、及び神宮文庫所藏本・池田龜鑑氏所藏本・中
原武次氏所藏本等がある。

嬰兒抄 上

むかし男おとこうゐかうふりしてならの京かすがの里にしるよし
してかりにいにけり

一此物語の段かたぎことに昔むかしといふ字をおけり是はその人の名そ
の時代じだいをもあらはさしと也源氏物語にいつれの御時にか
と書いたせると同じ心也ことにかの伊勢いせか家の集あひにもい
つれの御時にか大みやすむ所と聞えける御つほねに大和
におやある人ありけりとかきいたせり我事わがことなれともかく
おほめきてかきいたせるさま此物語によくあひ似にたり

一おとこは業平なりひら也むかし男おとことつゝけてはよます昔とくをき
りて男うゐかうふりしてとつゝくへし又句をきりてなら
の京よりかりにいにけりまてよむへし又いはく段ことに
むかしとはよみきるとはいへともさのみみゝにたつやう
にはむやく成へし

一うゐかうふりとはかふりのはしめぞくたいのさたまる儀
也業平一期いちにの事を書かくゆへにまつうゐかうふりとかきいた
したるなりしかればうゐかうふりしてならの京とつゝけて

はよまさる也うゐかうふりしてのちいつにても奈良ならの京春
日かの里に知行ちぎちぎありければそこへたかがりしにゆくといふ
事なり

その里こゝにいとなまめひたるおんなはからすみけり此男か
ひまみてけり

一なまめひたるとはこびてうつくしきといふ事也ちやうど
んかにをもと人にたすけおこされてこひてちからなしと
あるもうつくしくたよ／＼としたるさま也このこひてと
あるもなまめくも同じ事とそによへんにまゆの字也猶なほゑ
ひす歌にくはし引歌

引歌
をみなめしなまめきたてるすがたおやうつくしよしと
せみのなくらん

引歌
秋あきの野になまめきたてる女郎花あなかしかまし花も一
時 かしがましきはもの／＼しきなり

一はらからとはおとゝひ也

一かひま見とはものゝひまよりほのかにみえたる也垣かきのひ
まより見たる心ともいへりされともそれはあまりにかた
したゝ物のひまよりかよし

おもほえすふる里にいとほしたなくてありければこゝろま
とひにけり

一 おもほえすはおほえす也、思ひもよらずの心也、

一 はしたなきとは、似あはざる事也、たとへば上らふなど
のたちゐあら／＼しきをもはしたなきと言なり源氏物語
にも此詞おほしそれは所によりて心かはるなり桐つほの
巻にいとほしたなき事おほかれとかたしけなき御心はへ
のたくひなきをたのみにてましらひ給ふなとあるはあひ
そふなき事どもおほかれどいふ事也又同じ巻にえさら
ぬめだうのとをさしこめこなたかなた心をあはせてはし
たなめにわつらはせ給ふ時もおほかりとあるはあざむき
なんぎさすると言事なり又乙女の巻に雲井のかりのめの
とか夕霧の御事を物のはじめのろくぬすらせよなとつぶ
やくを聞給ひてかれ聞給へ我をはくらいなしとてはした
なむると言義也かく所によりてすこしつゝ心かはるとお
もひ給ふへしかやうにあればてたる所にうつくしき上ら
ふなどの有はにあはさるといふ義也

つさもこそは夜半の嵐のあらからめあなはしたなのまきの

いた戸や これも似合さるといふ義也

一心地まとひにけりとははやれんほの心也但かゝるふるさ
とにかやうにうつくしき人のあるはいか成ゆへそとふし
んしたる心ともいへりされとも源氏はきくの巻にさて
世にありと人にしられすさひしくあばれたらんむくらの
かとに思ひのほかにらうたげならん人のとちられたらん
こそかぎりなくめづらしくはおほえめいかてはたかゝり
けんとおもふよりたかへる事なんあやしく心とまるわさ
なりとあるも此こゝろ也しかれば戀慕の義と猶しるへき
なり

男のきたりけるかりきぬのすそをきりて歌をかきてやるそ
の男忍ふすりのかり衣をなんきたりける

一 かりきぬのすそをきりてとは、そのきぬに歌をかきたる
にはあらず歌かきたるたんさくにそのきぬを切てそへて
やるなりすなはちしのふすりのかりきぬなれは我心のみ
たれたるはかくのことしと見すへきため也忍ふすりの事
むかしみちのく忍ふの郡にうつくしき紋ある石ありそれ
に紫の根をすりつけ其石にきぬをおしつくればうつくし

きもんいてきたる也それを忍^{しの}ぶすりのきぬとはいへり
春日野のわかむらさきのすりころも忍^{しの}ぶのみたれ^云かきりし
られすとなん

一歌の心はじよかなり、まづところなれば春日野のとよめ
りむらさきはかすかのある草なれば春日野のわかむら
さきのすり衣といひつゞけたる也下の句はそなたを忍^{しの}ぶ
心のみたれはかきりなしといふ義也、次の詞となんとよ
みきるへし、但此ともしも歌^云につゞけてはよむへからす
かきりしられすとよみきりて又となんとよむへし
をいつきていひやりける^切ついでおもしろきことゝもやおも
ひけん

陸奥の忍ぶもちすり誰ゆへにみだれそめにしわれならな
くといふうたの心はへなり

昔の人はかくいちはやきみやひをなんしける^也

一おひつきていひやりけるとは人なとおふ心^{こころ}にはあらず
やかてといふ心也世上におつつけてなといふに同し
一ついておもしろき事とは此歌は古歌なれとも此歌^{うた}のかへ
りによく相當したりといふことをついておもしろきといへ

り此歌は河原左大臣とをるころの女にのみてやり給ひし
うた也その心はしのふすりのやうに心^{こころ}のみたれたるはた
れゆへとかおもふらんそなたゆへにこそみたれたれ我が
心にてはなきそとよみ給ひし也それを今の女のかへりこ
とにする時は忍^{しの}ぶもちすりのやうに誰^{たれ}ゆへみたれそめ給
ひし我が事にてはあるましき物をと心^{こころ}をもちぬかへたる
也きめうたるさくたるへし古歌を返歌に用る事そのたく
ひおほし源氏物語にもつうつせみの葉にをく露のこかく
れてしのひ／＼にぬるゝそてかな是は伊勢が歌也然共源
氏の御歌に空蟬^{うつせみ}の身をかへてける木のもとにあそはし
つるその返歌によくかなひたれはにやうつせみの葉にお
く露とかきたる也

一といふ歌のころはへなりとはかく心をもちぬかへたる
事きとく也といせかほめたる詞也我^{われ}ならなくにと此との
字も歌につゞけてはよむへからす歌をは歌によみきりて
といふ歌の心はへとよむへし

一むかし人はかくいちはやきみやひをなんしけるとは是も
伊勢かほめたる詞也、いちはやきとはなさけといふ心^{こころ}也

昔人はかやうにはや／＼と歌などをよみかはす事のかしこかりしよとほめたる也、又言クみやひとは風のすかたとかけりきやしや風流ふうりゅうなと言心こころなり又なさけといふ義也なり源氏わかなの巻にこの君は物のみやひふかくとゝのへ給ふ人と言り又同巻に三日のほとはかのゐんよりあるしの御かたへいかめしくめつらしきみやひし給ふといへりむかし男おとこありけりならの京ははなれ此京は人の家まださたまらさりける時にしの京に女ありけり

一ならの京ははなれ此京は人の家まださたまらさりける時とは仁王四十三代の御門げんめい天王より四十九代くわうにん天王まで七代はならの宮古にまし／＼けるをくわんむ天王てんわうの御時ゑんりやく三年に山城の國長岡ながおかへ移り給ふ是則これすなはち西の京也そのちひかしの京をこしらへ給ひてゑんりやく十三年に此東の京へ移り給ふ又業平はてんちやう二年に生れ給ふとしかれと都みやこうつりはありても家作いっさくりしゆひせさるにやこと／＼しき事なればさもあるべきや人のふしんある事也そのあひだの事なるべし、その事を此京は人の家まださだまらすといへり

一にしの京に女有けりとは東はしゆびせさるによりよき人はいまだ西にしの京に有し也あり

その女世人にはまされりけりその人かたちよりは心こころなんまさりたりけるひとりのみもあらさりけらし

一世人にはまされりけりとはまつかたちをほめたる也次の詞に心なんまさりたりけるとは先世上にある人よりは勝まさりたりとかたちをほめて又かたちよりは心猶なほまさりたりとかけり是人ひとをほむるにじやうぼんのほめやうなりといへり又言ク世人とあるを公家くけかたにてはのもしを加くわてよの人とよめる也、そのゆへはごうだのゐんの親王の時の御いみなをよ人と申たるゆへなり、又後嵯峨さかの院の御いみなを國人と申しかば時の人四書五經しよきやういけい已下いづれのしじやくにも國人とある所を國たみとかうしやくせられし也萬事にそのきつかひある事也

一ひとりのみもあらさりけらしとはぬしある人と聞えたり、古注には二條の后とかけり、しかれとも此物語に名のあらはれたるは是非ぜひに及はす名のあらはれざるをこれかれかなとたつねとふ事あるへからすと也和歌わかにより人

しらすとあることしと思ふへし

それをかまめ男うち物かたらひてかへり来ていかゝ思ひけん時は彌生のついでに雨をほふるにやりけるおきもせずねもせてよるをあかしては春のものとてなかくらしつ

一まめおとは葉平也、實なる男といふ義也、色このみの名にたてる人を實なる男といへる事そのしさいあるへし、此人はかぶの菩薩の化身なれば衆生さいどの方便の心ばかりがたし能々しりよ有へき事也次の詞にかへりきていかゝおもひけんとはあかすこひしきなるへし

一雨そふるにやりけるとは春雨のしつかにふりて物かなしきに思ひあまりて一首を送るゝにや其時節のあはれをきんみすへし

一雨そふるのふもしにこりてよむへき也新古今に^{引歌}春雨のそほふる空のおやみせてをつるなみたに花そちりける是はしつかなる春雨の躰也、みそれそほふる時雨そほふるともあれはたゝふることなるべし^{引歌}いやひこのおのれ神さひ青雲のたなひくひそらみそれそふる^同幾山の水々く

れなひに染ぬらんそほふる時雨けふもまなくに

一^紅おきもせずねもせずとは此歌は戀の歌にとりてはごんご同斷心行所めつのうたなりよるはおきもせずねもせてあかしひるはつくゝと^歌なかも暮すと也春は長雨のふる物なれば詠めくらすに長雨の心こもれり戀の歌よまん人はわかこつちを捨て此うたを數へん吟ぜよと俊成も定家も仰られし也、又いはくながめはなげきの心也、古今物の名もへいまいくか春しなければ驚も物はなかもておもふへらなり

むかし男ありけりけさうしける女のもとにひしきもといふ物をやるとて

おもひあらはむくらの宿ににねもしなんひしきものには袖をしつゝも

二條の^{でう}後のまた御かともつかうまつり給はてたゝ人にておはしける時の事なり

一けさうしけるとはおもひをかくる事也葉平より二條の後へひじきもといふ海草をおくらせらるゝとてそのひしきをたち入てよまれる歌也然^{しか}は此ひしきまへの詞にはにぞ

るべし歌の時はしもしをすむへきなり此五もし思ひあら
はとおもひなくてあらはといふ義也思ひなくてあらは
葎の宿に袖をしきてなりともねん物をと也又いちぜんの
御説には眞實の思ひあらは葎の宿に袖を敷て成共その人
とかたらんにはうかるましきと也萬葉のうたにへなにせ
んに玉のうてなも八重葎はへらん宿にふたりこそねめ是
本歌也業平の歌を本歌にして新せんさい集にへ思ひあら
は涙に袖はくちはてぬ葎の宿に何をしかまし又新古今が
けいのうたにへたへてやは思ひありともいかせんむく
らの宿の秋の夕ぐれ此歌はたとひおもひなしとてもむく
らの宿のさひしきには堪忍成間敷とよめる也然ればがけ
いの歌なを此心によくかなへるよししでん也次の詞に二
條の後のたゝ人にておはしましける時の事とは後の御あ
やまりをなんじて伊勢がことはれる也げにもこの君十七
の年五節の舞姫に立給ふ入内は廿六の御年なれば尤その
此はたゝ人にてあるへきなり

昔ひむがしの五條におほきさいの宮おはしましけるにしの
たいにすむ人ありけり

一ひんかしの五てうとは東の京の五條なりおほきさいは染
との也そのとのゝまします御所の西のかたのたいに二條
の後ましますといふこと也

それをほいにはあらて心さしふかゝりける人ゆきとふらひ
けるをむ月の十日はかりのほとにほかにかくれけり

一ほいにはあらてとは本意にはあらて也業平の心のまゝに
はあらさる也又言クほいにはあらてとはしのひくと言
事也あらはにはあらてといふ事也すゝきなどのほに出る
といふもあらはれいつる心也古今のうたにへ秋の田のほ
にこそ人をこひさらめなとか心にわすれしもせん此うた
の心なるへし但まへのほんいの義まさるへきと也業平心
さしふかくてたひくきたれるを世の聞えをおほしめす
にや正月十日比に御産所をかへ給ふをほかにかくれにけ
りといへり

あり所はきけと人のいきかよふへき所にもあらさりければ
なをうしとおもひつゝなん有ける

一そこにましますとはしりなからかよふへき所ならねはな
をうしとおもふ也此なをの字に心をつくへしさきくも

後のなさけなかりし御心をうしつらしと思ひ佗しに今は
御あたりへさへまいりかよはねはなをうしとおもふなり
またのとしのむ月に梅の花ざかりにこそをこいていきでた
ちて見ゐてみゝれとこそにるへくもあらず

一又のとしはあくる年也正月の比都の花ざかりにこそまい
りかよひし事をおもひいてゝありし御所へ参りみれとい
さゝかなくさむこゝろなくこそにかはるなり

うちなきてあはらなるいたしきに月のかたふく^也までふせり
てこそをおもひ出てよめる

一あはらなるいたしきとかけるはかならずあれはてたるに
はあらずぬしのなき所は物さひしくあれはてたるやうな
る物也とをるのおとゞはて給ひてのちこんゐんのおとゞ
其門を過給ふとて

^{引歌}へうちつけにさひしくもあるか紅葉ばもぬしなき宿は色な
かりけりと^よ讀るも此心也

月やあらぬ春やむかしのはるならぬわか身ひとつはもとの
身にして

とよみて夜のほのとあくるになく／＼かへりにけり

一此うた業平のうたの中にも世にすぐれはなはた心ふかき
也まつ五^歌もしにあまりのかなしさに月はみしよの月にて

はなきかと月をとかめて月やあらぬとよめりさて次の詞
に春をとかめて春もむかしのはるにてはなきかと也さて
もあやしや我か身のうさはもとのまゝなる物をと思ひの
せつなる心實^{まこと}におろかなる詞にてはいひつくしがたし俊
成卿も此の月やあらぬと、手にむすふ水にやとれる月影

二しゆをなんかんし給ひしと也よく／＼ぎんみすべし
昔男有けりひんがしの五條わたりにいと忍びていきけり、

みそかなる所なればかとよりもえいらてわらはへのふみあ
けたるついひちのくづれよりかよひけり

一ひんがしの五條^{ごじょう}とは、東の京の五條也、みそかなる所な
ればとはおんみつの所なればかどよりはいらてついちの
くづれよりかよふ也ついちのいの字を引いてもひととも
聞えぬやうによむべし、古今にはかきのくづれよりとあ
り

ひとしくもあらねどたひかさなりければあるし聞つけて
その通路^{かみち}に夜ことに人をすへてまもらせければいけともえ

あはてかへりけり

伊勢のうみあこきかうらにひくあみもたひかさなればあ

らはれにけり此歌の心これにひとしあるしは染とのゝ后
也さてよめる

人しれぬ我かかよひちの關よりはよひ／＼ことにうちもね
な／＼とよめりければいといたう心やみけりあるしゆるし
てけり

一歌にへちの義なけれどかよひちの關もりうちもねよかし
と思ひ侘たる心あはれふかし人しれぬの五もしわれとい
はんため也かすならぬ身なといふ心也此歌を染との聞給
ひて心やましくあはれ給ふといふ事をいたう心やみけ
りとはいへりあるしゆるしてけりもばんをゆるすにはあ
らすあはれみ給ふ心をゆるすとはいへり

二條の后にしのひて参りけるを世の聞えありければせうと
たちのまもらせ給ひけるとぞ

一これも染とのより仰らるゝにより二條の御きやうたい衆
より人をいたしてまもらせらるゝなるへし又いはくゆる
してけりのけもしおほかたにぐるべしといへり但しせつ

にはすむべしとあり、能登のこうりんゐんと又ほたん
くわなどもすみてあそばされし也

むかし男有けり女のえうましかりけるをとしをへてよはひ
わたりけるをからうしてぬすみていといとくらきにけり
一えうましきはえかたき女といふこと也、からうしてとは
やう／＼にしてぬすみていたる也しんらうのしんの字を
からうとよむ也此段も二條の御事成へし

あくた川といふ河をゐていきければ草のうへにおきたりけ
る露をかれは何そとなんおとこにとひける

一あくた川の事禁中にちりをなかつ川也ゐて行はつれゆく
也くさのうへの露なとも見なれ給はぬにやかればなにそ
ととひ給ふなり

ゆくさきおほく夜もふけにければおにある所ともしらて
神さへいみしうなりあめもいたうふりければあはらなる
くらに女をはおくにもし入て男ゆみやなくひおひてとく
ちにおりはや夜もあけなんとおもひつゝゐたりけるにお
にはやひとくちにくひてけり

一ゆくさきおほくとは行末のとをき也みちいそくとて男御

いらへをも申さぬてい也その夜かみなり雨ふりければゆく事かなはさるにやあれたる座敷のあるに女をはおき参らせて男はとぐちにありてけいこしたるてい也その時業平は近衛つかさなればゆみやなくひおひてとありこんえつかさは何事にても禁中にさはかしき事あればゆみやなくひにてかんりのぢんにしこうする物也おにはやひとくちにくひてけりとはすへのことはにみゆ人のとりたるをさてはおにのくひたるよと中將思ひさはかれしたういをかきたる心尤面白此所に色々義あれ共いらさる事も也

あなやといひけれと神なるさわきにえ聞さりけりやう／＼夜もあけゆくにみればゐてこし女もなしあしすりをしてなけともかひなし

一あなやといひけれともは女のあゝといひつらんをわれはかみなるさはきに聞さるかとなりあしすりをしてとは女をうしないて中將のもたへられたるさま也ちやうこんかに玄宗しよくの國より御歸の時やうきひのはて給へるばぐわいがはらにてなけき給ひしありさまをこゝにいたつ

てうちよしてさることあたはずといへり是もちうちよとはあしすりのさま也又源氏かけるふの巻にも手ならひの君をうしなひてめのとかしたひなけきしにもおさなかりしほとよりつゆ心おかれたてまつる事なくちりはかりもへたてなくてならひたるに今をかきりのみちにもわれをおくらかしけしきをたに見せ給はさりけるがつらき事と思ふにあしすりといふことをしてなくさまわかき子のやうなりとあり又もんぜんにさたとしてふしまろふとい事有此さたの字もあしすり也、又いはく土佐の國にさた寺といふてらあり、あしすりの寺とかけり是をさたじと名附る事は其寺の住ち弟子といはく我すてに年老たり今は此寺を汝にゆづりて我はいか成いはほの中にもこもりゐて命のおほりを心しつかにまちなんといへは弟子のいはく我幼少より片時もはなれ参らせすいかならんいはほの中にもなつみ水くみて御側にこそあらめとなきしたふ程に此僧よにあきれてにけいてぬ其弟子あしすりしてなまとなさま實にあはれなりとて則あしすりの字をかきてさたじとなつけたるなりあまり事おほく候へともついて

にかき侍る也

しら玉かなにそと人のとひし時露とこたへてきえなまし物を

一此うたの心實にあはれ也草の上の露を何そととはれし時露にて侍るとこたえて則我も消なまし物をその時御いらへさへ申さてなにしにいき残りけんと後悔のさま也

これは二條の後のいとこの女御の御もとにつかうまつるやうにてゐたまへりけるをかたちのいとめてたくおはしければ盗みておひていたりけるを御せうとほりかはのおとゝたらうくにつねの大納言又下臈にて内えまいり給ふにいみしうなく人あるを聞つけてとゝめてとりかへし給ふてけりそれをかくおにとはいふ也けりまたいとわかうて後のたぐにおはしける時と也

一いとこの女御とは染とのゝ后なりちうじんこうとながらのきやうはおとゝひなりそめとのちうじんの御子也、二條の後はながらの御子也しかれはいとこ也二てうの後わかておはせしときそめ殿の御そはにおき給ひし也それを業平ぬすみていつるをいたうかなしいくなき給へは

此君の御兄弟衆まだ下臈のうむかくにてだいらへ参り給ふに是を聞つけて取かへし給へるを業平の心におにの取たるかと思ひさはかれしていをまへの詞にありくとかきたるなりきたいとわかうてとは此后廿六の年じゆたいし給ふそれいせんの事なれはなりせうとは兄の事也又おとゝをもしふ事あるか太郎くにつねも堀川のおとゝもみなながらの御子也然るをちうじんこうに御子なきゆへなからのきやうのちらうきみほりかはをやしなひ給へるなりほりかはのおとゝははやく大臣に成給ふゆへおととなれ共さきに書なり

むかし男ありけり京にありわひてあつまにいきけるに伊勢尾張のあはひの海つらをゆくに波のいと白くたつを見ていとゝしく過行かたの戀ひしきにうら山しくもかへる波かなとよめりけり

一此段よりさせんをかきいたせる也おもひありて都を出る人はさもあらめ草木のいろも目につき波風のをと共あはれなるへしいとゝ都のかたの戀しきにしら波のよせてはかへりく心のまゝなるをうら山しやとよめる歌也心を

よくつくへしせうもんにいはいくあさ／＼ときこゆる歌に
は猶心をつくへしと也

昔男女ありけり京やすみうかりけん東のかたに行てすみ所
もとむとてともとする人ひとりふたりして行けり信濃の國
あさまのたけにけふりのたつを見て

しなのなるあさまのたけにたつけふりおちこち人のみやは
とかめぬ

一さきのたんに京にありわひてとかきて此段に京やすみう
かりかりけんとはかりかきてなにゆへのさせんともあら
はさす尤トモおもしろしとともとする人ひとりふたりとは
わうめいにそむきて都を出る人の物淋しくたつぎなきさ
ま尤也遠近人とはあなたへ行人かなたへくる人の事な
り、あさまのたけのけふりのふせいこれ面白しとも哀と
も見とかめぬ人やはあるへき何もおもしろしとは見とが
むべきかおもひなき人はたゞおほかたにみたるにや我は
思ひゆへ身にしてみて哀におほゆるかといふ心をいひの心
あまりてことばたらさる歌也、かんけの御歌にへ夕され
は野にも山にも立けふりなけきよりこそもえそむるなれ

とあり

昔男有けりその男身をえうなき物に思ひなして京にはあら
しあつまのかたにすむへき國もとめにとてゆきけり元より
友とする人ひとりふたりしていきけりみちしれる人もなく
てまどひいきけり

一此段上に同じ身をえうなき物とはおもふ事もかなはされ
は都にありてもせんなしとなりへ朝夕にみつへき君とし
たのまねは思ひたちぬる草枕なり此心同前か又源氏かし
はきの巻にいはいけなかりしほどよりおもふ心ことにて何
事をも人に今ひとときはまさらんとおほやけわたくしの事
ふれつゝなのめならす思ひのほりしかとその心かないが
にたかりけりとひとつふたつのふしことに身をおもひを
としてこなたなへての世の中すさましうなりてとあり此
心にひとしかるへしひとつふたつのふしとあるもまづは
女三の宮のおもひかなわされはといふ心なりみちしれる
人もなくてとは業平もともなふ人もみなふなかふあんな
ひといふ義也

三河の國八つはしといふ所にいたりぬそこを八はしといひ